

## ごあいさつ

公益財団法人かながわ考古学財団は、文化財保護法の趣旨が生かされるよう、神奈川県内の発掘調査を実施しています。調査成果を広く公開し、県民の皆さまに活用していただくため、学術・文化の振興と地域文化の発展に寄与することを目的として活動しています。

この考古学特別研究講座では、これまで当財団が発掘調査を行った県内各地の遺跡を対象に、その発掘調査報告書の成果から導き出された地域の歴史像を研究し、提示いたします。新たな問題提起をすることにより、埋蔵文化財に対する興味・関心と理解をより深めていただくことを目的とするもので、副題タイトルは変更されましたがこの講座は昨年度の第3回に引き続き、4回目の開催となります。当財団の調査研究の集大成とも言うべき普及事業であり、同じ内容の報告を午前と午後に行うことで、より多くの方々にお集まりいただくことといたしました。

今回のテーマは旧石器時代の「遺跡間接合」を取り上げました。財団20周年記念公開セミナーでも取り上げられましたテーマでもあり、より細やかに旧石器の世界を追求していく内容となっております。

最後になりましたが、当財団の事業に関して、日頃よりご指導、ご協力を賜っている関係諸機関・諸氏に、お礼を申し上げます。

2016(平成28)年9月

公益財団法人かながわ考古学財団  
理事長 村山正和

# 事例報告

## 吉岡遺跡群 B 区と用田鳥居前遺跡

栗原 伸好

### はじめに

土器出現以前、日本に初めて人類が足を踏み入れた旧石器時代。1949 年、群馬県岩宿遺跡でこの時期の人々が日本でも生活をしてきたことが公に認められてから 67 年。2010 年 5 月段階では、全国に 10,150 もの旧石器時代の遺跡が存在している事実が報告され、このうち、神奈川県には 456 もの遺跡が存在していることが明らかにされました。

しかし、今回ここで主にお話をさせていただく内容は、綾瀬市と藤沢市との境界付近に存在する吉岡遺跡群 B 区（第 2 次調査）と用田鳥居前遺跡から出土した旧石器時代の小さな石器に関することのみです。ところが、これらの石器が我々にもたらしてくれた成果は、大変大きなものでした。

ここでは、この両遺跡から出土した小さな石器がもたらしてくれた内容をできるだけ分かりやすく紹介し、当時の人々の生活の一部をイメージできるよう努めます。

### 1. 旧石器時代の調査

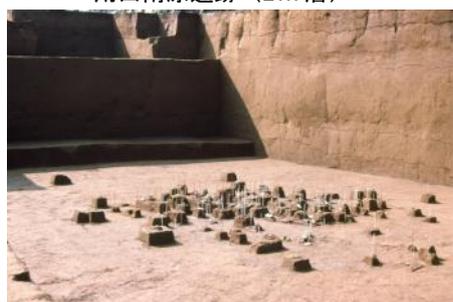
下に示した写真は、いずれも旧石器時代の調査中に発見された遺物の出土状況を示した写真です。但し、よく見ると時期や遺跡は異なります。では、ここで質問です。皆さんは、これらの写真をご覧になって、どの様な感想をお持ちになりましたか？



用田南原遺跡（L1H 層）



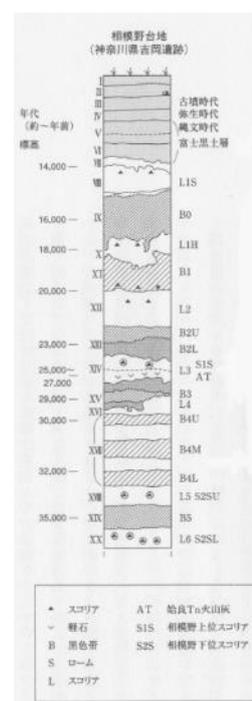
用田鳥居前遺跡（B1 層）



用田南原遺跡（B2 層）



小保戸遺跡（B1 層）



土層柱状図

旧石器時代の遺跡からは、ほとんどの場合、石器と小さな炭化物しか発見することができません。これは、日本の土壌が酸性土のため、木・皮・骨などの有機質の物質を溶かしてしまうからです。このため、旧石器時代の調査を実施すると、時期や場所が異なっても、比較的類似した出土状況が確認されるのです。

但し、神奈川県の場合、富士や箱根といった火山灰の供給源が近いため、関東ローム層の堆積状況は良好で、黄色と黒の土層が交互に堆積するという特徴が広く観察されることから、自然の時間の物差しは良好な状態で確認することができます。



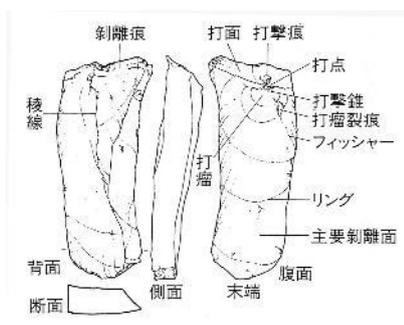
栗原中丸遺跡ローム層堆積状況

では、この様に、時期も場所も異なるのに類似した出土状況を示す旧石器時代の人々の生活を明らかにするには、一体どの様に考えれば良いのでしょうか？

## 2. 石器の観察

### ①石器表面観察の基礎知識

出土した石器の表面をよく観察すると、右側の図の様に色々な情報を得ることができます。このような特徴をしっかり把握しておく、石器の作り方を考える際に極めて有効です。



剥片の名称

(旧石器文化談話会編 2000 より)



剥片の腹面

### ②使用石材と分類

遺跡の中で石器を作っていた場合、目的の石器は1点であっても、それを作り上げるまでには、大小たくさんの石の屑が同時に産出されます。つまり、それらの資料は、いずれも石器製作を行った場所に残されているものであり、これらをきちんと元通りに復元できれば、石器の作り方を考える上で極めて重要な成果になります。

このため、旧石器時代の発掘作業終了後、出土品整理作業に着手すると、まず出土した石器を同じ石材ごとに分類します。次に同じ石材の中をさらに細かく観察し、できるだけ同じ原石から製作されたと考えられる資料ごとに細分します。

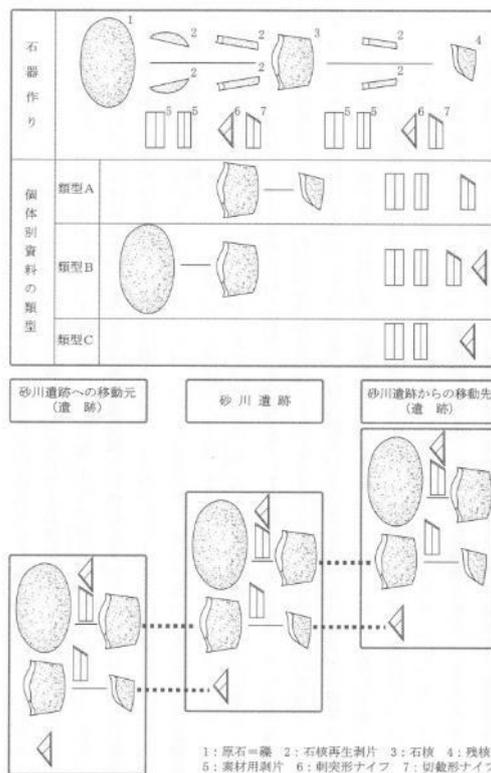
### ③接合作業

同じ石材、特に同じ原石から製作された石器は、その材料を集めれば、基本的には元の形に復元できるはずですが、①でお話しした石器表面に観察される様々な特徴を観察しながら、原石ごとに分類された各石器の接合作業を行います。

では、石器の接合作業を実施することで、どのようなことが分かるのでしょうか？

まず第1に石器の作り方を理解することができます。たくさんある同一原石資料が接合されることにより、原石の何処を叩き、どんな順番で石器の素材を剥がし、仕上げたのかということを把握することができます。

第2に当時の人々の行動を類推することも可能となります。下の図をご覧ください。



砂川遺跡の石器の接合例（稲田 1988 より）

砂川遺跡の石器の接合パターン（安蒜 2011 より）

左側の図は、埼玉県所沢市に所在する砂川遺跡の石器の接合例です。どこかおかしいところに気付きますか？そうです。個体の中央の部分がすっぽりありません。

これは、一体どうということなのでしょうか？

では、次に右側の図をご覧ください。実は、砂川遺跡から出土した石器の接合資料を観察すると、大きくA～C 3つのパターンが存在していることが分かりました。砂川遺跡の分析を行っていた安蒜氏によると、上記の3つの接合パターンは、当時の人々の行動と関連させると、下記のような理解が出来ると考えました。

- **類型A**：原石の加工は別の場所で行い、石核を砂川遺跡に持ち込み、石器製作を実施した
- **類型B**：原石を砂川遺跡に持ち込み、石器製作を実施した
- **類型C**：他の場所で製作された石器のみを砂川遺跡に持ち込んだ

つまり、石器の接合作業は、単に石器の製作技法を復元するだけではなく、当時の人々が必要な時に必要な形で石器や石材を補給し（類型A～C）、必要な器種だけを他の場所（遺跡）に持ち込んだり、逆に他の場所から持ち出し、転々と移動を繰り返しながら生活をおくっていたという行動パターンを理解するために極めて大きな役割を果たしたのです。

### 3. 吉岡遺跡群B区（第2次調査）・用田鳥居前遺跡出土資料の遺跡間接合

上記の様な背景を踏まえ、旧石器時代の出土品の整理作業において、石材ごとの資料の分類・接合作業は、いわば普遍的な作業と位置付けられました。

しかし、この作業は、各遺跡個別では実施されてきたものの、複数遺跡間における資料の比較・検討は殆ど実施されていませんでした。この背景には、日本で実施されている大部分の調査が開発に伴い破壊されてしまう遺跡の記録保存のための行政調査であるということが大きく影響しているものと考えられます。

このため、日本には1万を超える旧石器時代の遺跡が存在しているにもかかわらず、砂川遺跡の分析で提起されたその成果は、長い間、想定の外を出ませんでした。

#### ①発見に至った経緯

- ・同一調査組織による発掘・整理両作業期間の重複が存在したこと
- ・両遺跡間の距離が南北に約2kmと比較的近接していたこと
- ・整理作業を同じ建物内で実施できたこと

#### 【吉岡遺跡群B区】

〈所在地〉綾瀬市吉岡 887 番地ほか

〈発掘作業期間〉

第1次：平成3年4月～平成6年9月

第2次：平成10年4月～平成12年3月

〈調査面積〉

第1次：28,690 m<sup>2</sup>

第2次：41,000 m<sup>2</sup>

〈出土層位〉B1層下部

〈整理作業期間〉平成12年4月～平成14年3月

#### 【用田鳥居前遺跡】

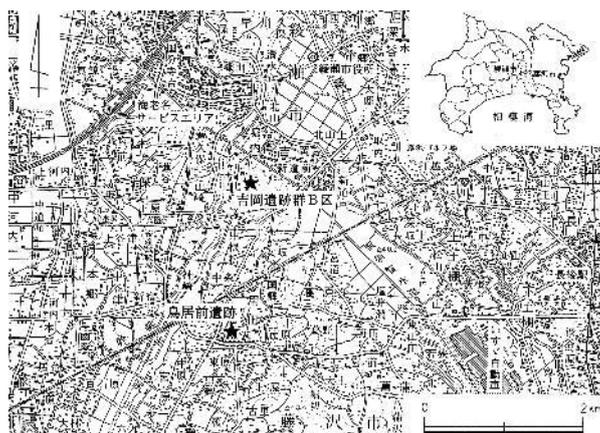
〈所在地〉藤沢市用田 655 他

〈発掘作業期間〉用田鳥居前遺跡：平成6年4月～平成10年12月

〈調査面積〉用田鳥居前遺跡：9,130 m<sup>2</sup>

〈出土層位〉B1層下部

〈整理作業期間〉平成11年1月～平成14年3月



吉岡遺跡群B区と用田鳥居前遺跡位置図

((財)かながわ考古学財団 2001 より)

## ②両遺跡の石器群の出土状況

下図は、両遺跡における遺物の出土状況を示した図です。遺跡間接合資料を出土した両遺跡ですが、その背景は大きく異なっています。

### 【吉岡遺跡群B区（第2次調査）】

10m×6m

（集中地点の規模）

732点

（出土石器数量）

ナ21、搔2、削1、彫5、楔1、  
被二次加工剥片16、微細剥離剥片13、  
削片2、剥片類659、石核7、磨石5、  
硬細凝14、碧玉（黄玉石）1、ホルン2、  
珪質岩1、珪頁1、硬頁2、黒4、安2、  
碧玉（赤玉石）1（計29種類）

（石器組成）

ナ2、彫1、剥片20、碎片1、石核2  
敲石16(接合後2点)、台石1

（母岩分類）

硬細凝7、安3、中凝1、珪頁1、頁1  
碧玉（黄玉石）1（計14種類）

5m×2mの範囲より81点の礫で構成  
石器集中の北半と平面的に重複

（礫群）

北東隣接部に小規模なものあり

（炭化物）

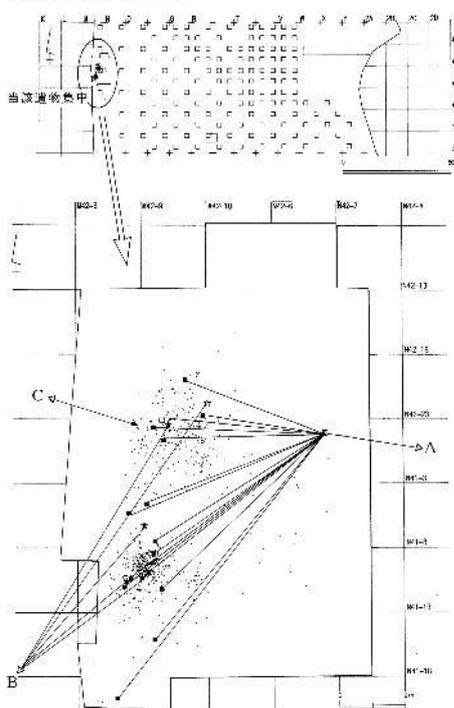
3,329点が2箇所の集中より出土

### 【用田鳥居前遺跡】

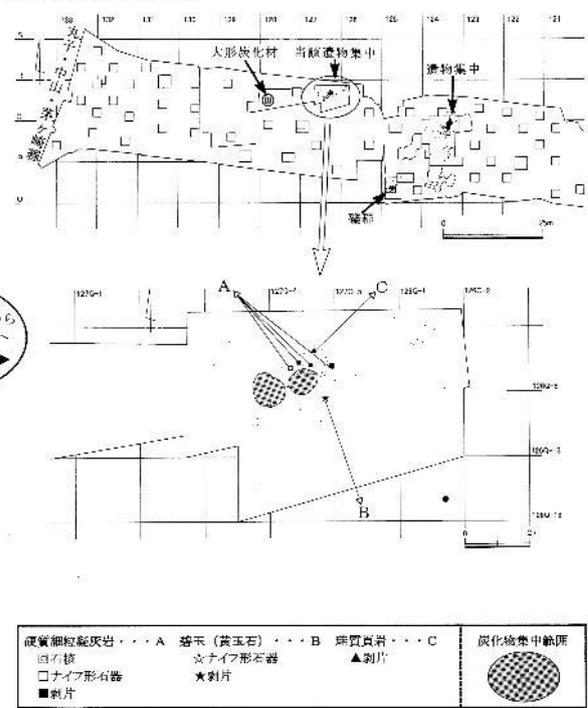
4.6m×2.9m

43点

吉岡遺跡群B区（綾瀬市）



用田鳥居前遺跡（藤沢市）



吉岡遺跡群B区（第2次調査）と用田鳥居前遺跡遺物出土状況（（財）かながわ考古学財団 2001 より）

### ③遺跡間接合資料

遺跡間接合資料が確認できた資料そのものについても、各遺跡で下記のとおり、各々の内容は大きく異なっていました。

#### 【吉岡遺跡群B区（第2次調査）】

215点出土。8個体の接合あり。ナイフ・彫器・被二次剥片2、微細剥離剥片4、石核3、剥片類200。このうち遺跡間接合資料は、102点出土した個体。

28点出土。5個体の接合あり。このうち1個体が遺跡間接合。遺跡間接合個体の石器組成は、ナイフ形石器1点と剥片4点。

12点出土。微細剥離を有す剥片1点、剥片11点から成り、3個体の接合あり。遺跡間接合資料は剥片1点のみ。

（硬質細粒凝灰岩）

（碧玉〔黄玉石〕）

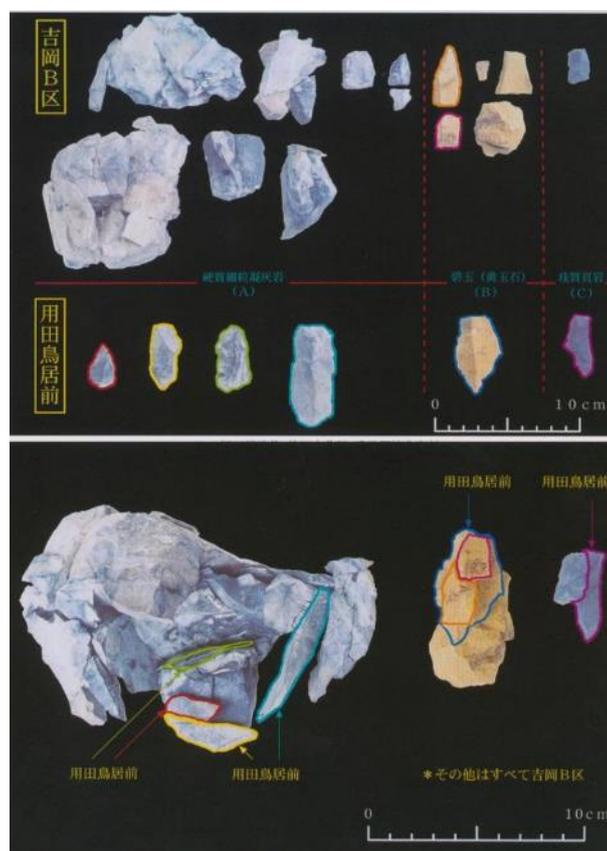
（珪質頁岩）

#### 【用田鳥居前遺跡】

ナイフ形石器1点、剥片3点出土。

剥片1点のみ出土。

彫器1点のみ出土。



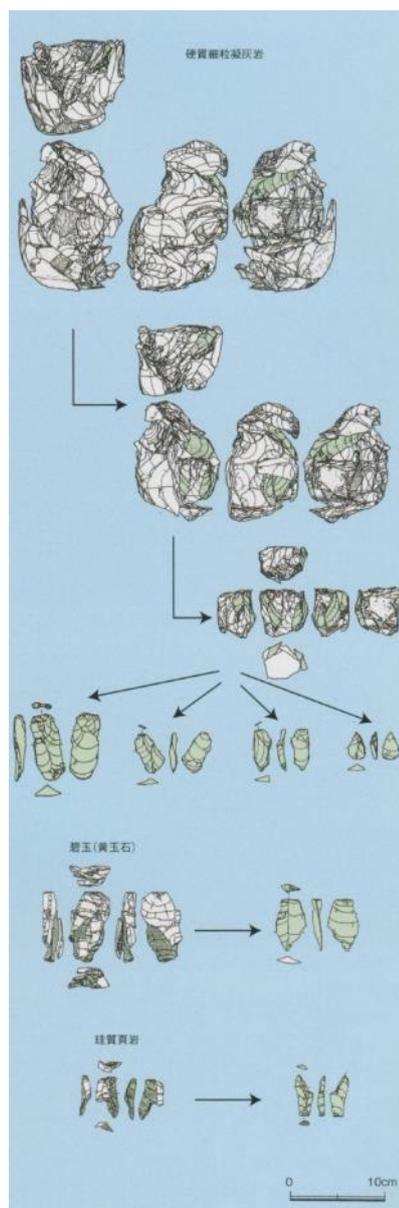
吉岡遺跡群B区（第2次調査）・用田鳥居前遺跡接合資料（（財）かながわ考古学財団 2002 より）

吉岡遺跡群B区（第2次調査）出土資料と用田鳥居前遺跡出土資料との遺跡間接合は、硬質細粒凝灰岩・碧玉（黄玉石）・珪質頁岩の3個体について確認することができました。

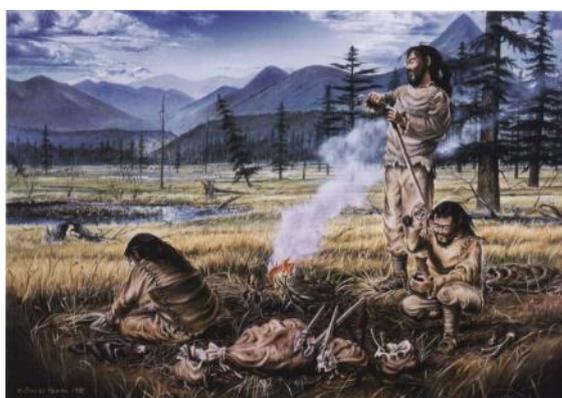
硬質細粒凝灰岩・碧玉（黄玉石）の2つの事例では、用田鳥居前遺跡出土資料が完全に吉岡遺跡群B区から出土した石器の剥片剥離工程の間に入り込んでしまっていることが理解できます。遺物の出土量や各資料の接合関係を観察すると、用田鳥居前遺跡出土資料は、吉岡遺跡群B区で製作されたものが持ち込まれたということが理解できるでしょう。

また、珪質頁岩の接合例でも、彫器、所謂吉岡遺跡群B区で加工された資料のみが用田鳥居前遺跡に持ち込まれていることが理解できます。

つまり、両遺跡の規模・石器組成・各資料の接合関係等から総合的に判断すると、当時の人々は、吉岡遺跡群B区で石器を製作し、必要最低限のものを持参し、移動生活を送っていたことが理解できます。これは、用田鳥居前遺跡の様な極めて小規模な遺跡であっても、石核・敲石・台石が石器組成に含まれていることから十分理解できることでしょう。更に用田鳥居前遺跡の中央部には大量の炭化物が出土しており、石器はそれを取り囲む様に出土しており、当時の人々の生活の様子が絵に浮かびます。



遺跡間接合資料概念図（栗原 2008 より）



旧石器時代の人々の生活の復元図（島田 2008 より）

一步踏み込んで考えるならば、吉岡遺跡群B区は、所謂ベースキャンプ地の様な役割を果たしていた遺跡であり、用田鳥居前遺跡はそこから狩猟のために一時的に立ち寄ったキャンプ地であったのではないかと考えられます。

この様に、2kmもの距離を隔てた遺跡間で、3個体もの資料が一方の石器製作過程の中に完全に入り込んでしまうという事例は、世界的にも本事例しか存在していないのではないかと思います。同時にこの成果は、前述の砂川遺跡における遺物の接合状況から類推された旧石器時代の人々の生活様式を具体的に証明することができた貴重な発見といえることができるでしょう。

#### 4. 遺跡間接合の類例

類例は多くはありませんが、他の遺跡でも、遺跡間接合が確認されている事例が報告されています。以下、主なものを紹介します。時期は、いずれも本遺跡よりは新しい細石刃石器群の時期のものです。

##### ①白草遺跡（埼玉県）

白草遺跡から出土した彫刻刀形石器に約500m離れた荷鞍ヶ谷戸遺跡から表面採取された削片が接合した例。

##### ②中ッ原第5遺跡B地点と中ッ原第1遺跡G地点（長野県）

黒曜石の原産地に近い長野県野辺山で、約500m離れた両遺跡から出土した黒曜石製の切断剥片の接合例及び剥片同士の接合例。

##### ③下モ原I遺跡と居尻A遺跡（新潟県）

下モ原遺跡から出土した頁岩製の彫刻刀形石器と居尻A遺跡出土の削片の接合資料。両遺跡は、比高差40m、距離約600mの距離を測る。両遺跡は、段丘面を違えて立地している関係にあり、当時の人々の行動範囲を改めて実感できる接合例。



津南段丘（佐藤・山本ほか 2000 より）



両遺跡の遺跡間接合資料（抜粋）

下モ原I・居尻A遺跡接合資料（津南町教育委員会編 2005 より）

## おわりに

日本の土壌は酸性土のため、土中の有機質の物質を溶かしてしまうことから、考古学的にはその影響は極めて大きなものと言わざるを得ません。特に、土器出現以前の旧石器時代の調査では、全国の殆どの遺跡から石器・礫類と僅かな炭化物粒しか発見できず、当時の人々の生活の内容を具体的に復元することは容易ではありません。

しかし、今回発表した吉岡遺跡群B区（第2次調査）と用田鳥居前遺跡の遺跡間接合資料やその大本になった砂川遺跡の石器の接合パターンは、当時の人々の知恵と具体的な活動の様子を我々に提示してくれます。このような地道な努力・視点が、いずれまた、新たなヒントを我々に与えてくれることでしょう。普段、何気なく見過ごしている事象も視点を変えることで大きな課題を克服するためのヒントになるかもしれません。

今後も、石器を色々な角度から観察しながら、少しでも当時の人々の行動をより具体的に復元できればと思っています。

### 【引用・参考文献】

- 安藤政雄 2011 「第1章 日本人類文化のあけぼの」『日本列島 石器時代史への挑戦』pp. 15-49 新日本出版社
- 稲田孝司編 1988 『古代史復元1 旧石器人の生活と集団』 講談社
- 旧石器文化談話会編 2000 『旧石器考古学辞典』 学生舎
- 旧石器時代研究プロジェクトチーム 2001 「旧石器時代後半における石器群の諸問題 ―相模野の遺跡間接合から―」『研究紀要6 かながわの考古学』pp. 1-18 財団法人かながわ考古学財団
- 栗原伸好 2008 「コラム8 遺跡間接合の石器」『大地に刻まれた藤沢の歴史Ⅰ ～旧石器時代～』pp. 76-77 藤沢市教育委員会
- (財) かながわ考古学財団編 2002 『かながわ考古学財団調査報告128 用田鳥居前遺跡』
- (財) かながわ考古学財団編 2003 『かながわ考古学財団調査報告153 吉岡遺跡群X B区 第2次調査』
- (財) かながわ考古学財団編 2004 『かながわ考古学財団調査報告168 用田南原遺跡』  
(第一分冊 縄文時代初頭～旧石器時代、自然科学編)』
- (財) 埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1993 『埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第129集 白草Ⅰ・北篠場遺跡川本工業団地関係埋蔵文化財発掘調査報告』Ⅲ
- 佐藤雅一・山本 克ほか 2000 『下モ原Ⅰ遺跡』 津南町教育委員会
- 佐藤雅一・山本 克 2006 「居尻A遺跡」『貝坂・桐ノ木平遺跡群(旧石器時代編)』pp. 61-121 津南町教育委員会
- 島田和高 『2008年度明治大学博物館特別展解説図録 氷河時代の山をひらき、海をわたる ―日本列島人類文化のパイオニア―』 明治大学博物館
- 鈴木次郎ほか 1984 『神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告3 栗原中丸遺跡』
- 津南町教育委員会編 2005 『津南段丘に暮らした氷河期の狩猟民』
- 堤 隆 1996 「Ⅲ 遺跡と石器 4 遺跡間接合」『中ッ原第1遺跡G地点の研究』Ⅱ pp. 83-85 八ヶ岳旧石器研究グループ
- 吉田政行・栗原伸好 2001 「吉岡遺跡群B区と用田鳥居前遺跡との遺跡間接合」『第7回石器文化研究交流会 発表要旨』pp. 43-48 石器文化研究会

※1頁目の写真・土層柱状図は(公財)かながわ考古学財団、2頁目のローム層の堆積状況写真は、神奈川県立埋蔵文化財センター刊行の各遺跡の発掘調査報告書より転載

【MEMO】



# 石器接合の意義について

砂田 佳弘

## はじめに

2000年7月11日(火)、吉岡遺跡群B区BB1L層出土石器と用田バイパス関連遺跡群用田鳥居前遺跡BB1L層出土石器が接合した。両遺跡は、当時の財団法人かながわ考古学財団二俣川出土品整理室で日夜報告書作成業務を遂行していた。遺跡間接合の目論見は、各遺跡出土石器観察の過程で「似ている」「付きそうだ」、「是非機会を待とう」という研究者間の心理的交流がかなり古くから存在した。当財団あるいは神奈川県立埋蔵文化財センターの時代から、至近距離間の宮ヶ瀬遺跡群内でも試みていた。あるいは、各種研究会での石器観察会、そして吉岡遺跡群や用田バイパス関連遺跡群の発掘調査の時点などである。

しかし、本格的な整理作業時での遺跡間接合の試みは頓挫していた。かねてより、吉岡・用田両遺跡の同一層位における類似母岩の観察から、いつかはという思いがあった。そして、はたせるかな、その日は現実を迎えたのであった。当財団が調査を実施した両遺跡の整理作業が奇しくも同一整理作業室で実施されていた。異なる行政単位の出土品整理を同一組織下で実施できた強みがある。相模野台地における2,000mという接合距離はその長さのみに目を奪われてはならない。日本の旧石器時代研究を進展させてきたフィールドとしても、また、遺跡の範囲、流域といった従来の石器群というまとまりを超えた、新たな石器研究方法の構築を図る嚆矢ともなりえよう。所謂個体資料研究であるモデルとしての埼玉県所沢市砂川遺跡石器研究を踏まえつつも、従来の遺跡内研究を超越した、間遺跡研究の新たな吉岡用田石器研究のモデルの構築も必要である。

## 1. 石器研究「接合」前史

岩宿発掘以前の石器に関わる接合は寡聞だが、接合の契機が折れであり、剥がれにある点は間違いない。「割裂の際か或はその後に折れたらしく、剥片の衝撃端が失はれ hinge fracture を示すものが多く、剥片内面に bulbs をとどめるものが少ない」(渡邊 1948pp. 35)という先駆的な「折れ」の観察を示している。通常的生活器具の補修における穿孔や接着の痕跡を見いだすにはさほど困難でないだろう。石器の接合については「割り」「割れ」の分類を基本に、個体別資料の分類基準など、接合原理を「破壊」という視点から、従来の旧石器研究を品評しつつも批判的に統括している(五十嵐 1998)。「破壊力学」の指摘は従来の割れ円錐による理解のみにとどまっていた石器製作の物理的理解を深化するには極めて有効であり(山田・志村 1989)、石器製作過程の分別にも有効な方法が見え隠れしているのである。

ここでは、日本の石器研究における「接合」意識の表現について報文を基礎としてとりあげ、石器研究における「接合」の捉え方やその見方について前史を幡いてみたい。

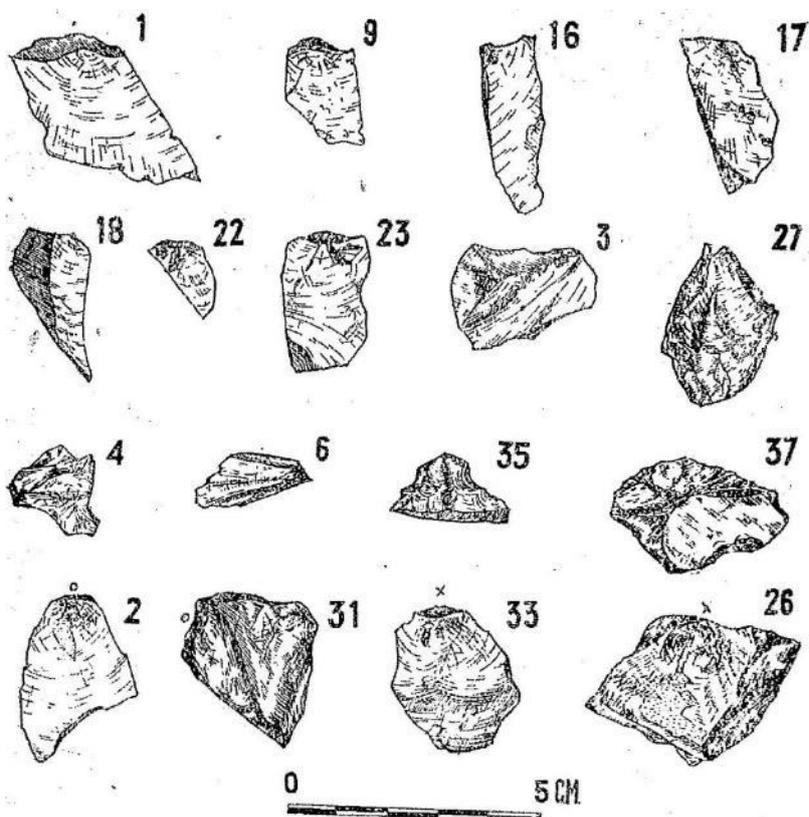
接合自体はすでに岩宿の整理作業に始まっていた。ただしその接合は折損した石器の断面が接合して完形に復原されるにとどまったようだ。「サイドスクレイパー様石器とエンドスクレイパー様石器」が、「採集した時はいずれも折半していて、整理の際にそれぞれ一個体になるものであることを知った」「しかし、折れた面を見ると、器面と同程度の石質変化を起こしているので、これが二つに割れたのは最近のことではなく、おそらく使用時に破損したものと考えたい。そうすれば、これらの石器はこの位置で使用され遺棄されたのであって、A区におけるこの地点の石器群は、他から移動されたものではなく、元位置をそ

のまま保っているものといえよう」(杉原 1956 pp. 20)。「本石器は遺跡で二分して発見されたが、後に一つになることが知られた。その接合面を見ると、剥離面と同じような石質変化している」(杉原 1956 pp. 36)。

これらの表現法は、「器面」に対する「折れた面」であり、「剥離面」に対する「接合面」である。いわば一個の石器の構成面であり、「接合」には石器製作工程における原材、石核、剥片、特定石器といった一連の石器製作行動における動的意識は見いだせない。

換言すれば、相沢忠洋採集の有樋尖頭器を「尖頭器として使用中に破損したものか、何かの意図をもって行われた剥離であるか分からない」(杉原 1956 pp. 48)との明言に表出している。

しかし、類似資料のない時代にあってその「石器」の剥離面の切り合い関係を透徹する



観察眼に驚異するのである。しかも、風化の度合い、原位置、遺棄の問題定義など、さら

#### 市川市丸山遺跡出土石器(杉原・大塚 1955)

に「原料を石塊あるいは母岩の形で受け入れて」(杉原 1956 pp. 3) にいたっては、原産地と石材環境にまで言及し、その後の石器研究の資料操作における基本である「母岩別資料」や「個体別資料」にまで視野に容れていたと言えよう。

市川市丸山遺跡は、1954年5月4日から調査を開始し、当初目途とした古墳調査では無く、旧石器時代の調査となり、3 m<sup>2</sup>から40点の遺物が出土した。「33は気泡の多い黒耀石の剥片であるが、軟出部出土の資料26である石核に合するのであって、まったく同一母体である」(杉原・大塚 1955 pp. 61)。

さらに、「○石核31(第一例)気泡の多い黒耀石。打面に手を加えた痕があるが、意識的な調整石核であるかは疑問である。剥離痕が二面に認められ、その一面は剥片2の剥離された跡である。両者の発見された垂直距離は不確実であるが、水平距離は一米四〇糎である。小形の不整形石核というべきであろう。○石核26(第二例)やはり気泡の多い黒耀石で、前者と同じ石材。打面は手を加えられているが、調整石核ではない。剥離痕が二面あり、その一面は剥片33の剥離された跡である。両者の発見された垂直距離は一五糎、水平距離は五〇糎である。前者とともに小形の不整形石核であって、本石器文化が意識的に小形の剥片を製造したことを示す資料であり、その性格を決定するに重要な資料である」(杉原・大塚同 pp. 66)。

すなわち、残核に剥片が接合する剥片剥離工程第Ⅰ類単打面の一旦を示すのである。

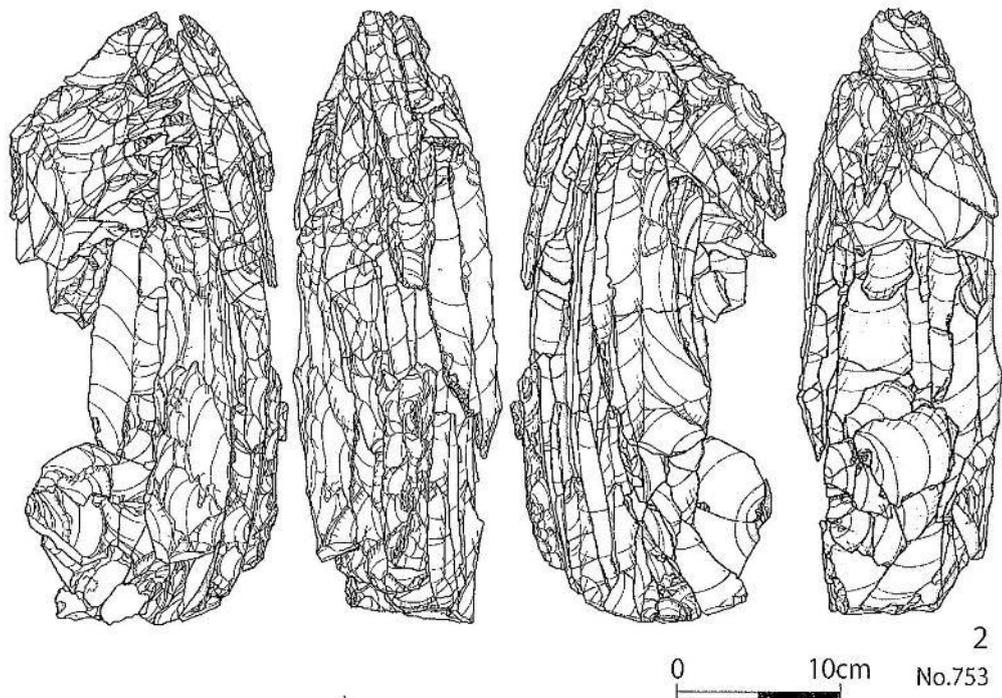
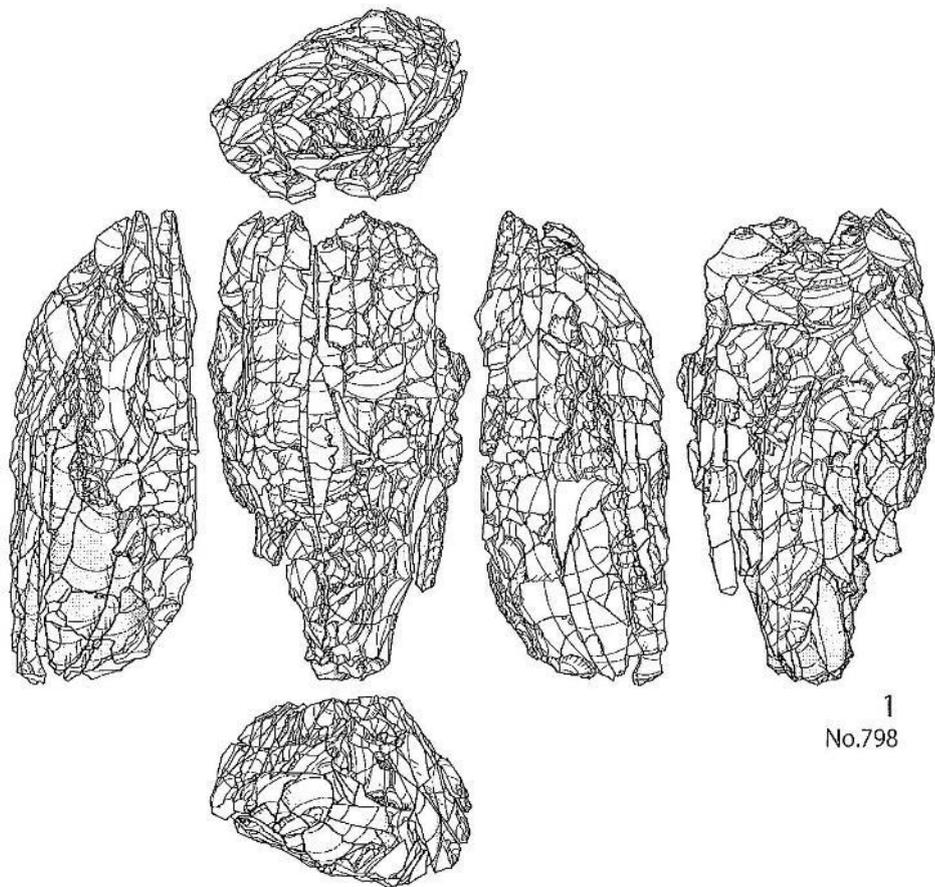
岩宿で指摘された石器の折損による接合資料ではなく、剥片剥離を如実に表現しているのである。こうした意識的な接合作業は、茶臼山遺跡(藤森・戸沢 1962)が最初だろうか。「昭和30年の末頃にこの遺物を実見する機会を得て、その時偶然に重なり合うのに気付いた。既に長野県茶臼山遺跡の石片で同様なことを経験してはいたが、5点の多くのbladeが重なるのは、当時として予期しない事実だった」(松沢 1960 pp. 1)という述懐は、1947年発見の福島県岩瀬郡鏡石村成田遺跡出土資料である。

成田遺跡における接合以前に茶臼山遺跡での接合が実践されていたのである。件の茶臼山遺跡では、「剥離作業の一部を具体的に示す接合可能な2つの資料が発見された」(藤森・戸沢 1962 pp. 18)。その一つは、剥片三点の接合資料であり、もう一つは、残核一点に剥片二点の接合資料である(藤森・戸沢 1962 pp. 17)。ただし、その表現は「接合可能な2つの資料」であり、未だ二個体の接合資料ではない。茶臼山遺跡の発掘調査は1952年の第4四半期に実施されている。すると、接合は1952年以降、成田遺跡での接合1955年以前となる。丸山遺跡の調査をはじめとするこの時期が日本における接合作業実践と成果の始まりにあたらうか。

実践的接合作業は、剥片の表裏を認識し、石材の基質・色調、風化度、打撃面や打面縁辺の状態、剥離面のリング・フィッシャーの発達など、石器の観察眼が試される場で

もある。換言すると、いかに母岩別分類が的確に実践されているかであり、接合の事実によってその母岩別分類の正当性が検証されるのである。

茶臼山遺跡の接合資料は黒曜石製の単設打面Ⅰ類剥片剥離工程と90度打面転位Ⅲ類



北海道上白滝2遺跡S b-9接合資料(高倉 2016)

剥片剥離工程である。成田遺跡では、I 類剥片剥離工程で、打点を左右に移動し稜線を形成しながら真正な縦長剥片が 5 点接合する資料である。しかもどの剥片にも打面縁辺調整あるいは、基部調整加工の施されたナイフ形石器を主体とするのである。接合者は「予期しない事実」と述べるが、石材こそ違え茶臼山の実践が意識下に存在したことは想像に難くない。

成田遺跡では、[blade と blade とが数点接合し合う事]、「番号の若いものが古いものの上に密着する」（鳥畑 1956 pp. 25）と、明確に「接割」あるいは「密着」という表現をしているのである。さらに、接合の意義が「石器から剥がされた石片もまた加工の考察に重要であり、それが接合できる場合はさらに立体的に経過を理解するための重要な資料となる」（松沢 1959 pp. 2）と述べられるのである。「立体的に経過を理解」するとは、単なる折れ二次元的な接合作業ではなく、出土資料全体のパーツから三次元的、3D 的な剥片剥離工程をより十分に理解することである。

当時が指標石器よる石器研究の趨勢にあつて、いち早く「石片」とその接合作業に石器製作工程復原の重要性を説くのであり、その研究姿勢は一貫し（松沢 1997）、接合資料の読み取りは継続するのである。

その後の接合資料は、砂川遺跡の石器研究以降急速に増大した。一遺跡の集中地点内での接合資料は、集中地点間の接合資料と歩を進めた。1955 年刊行の丸山遺跡の接合距離 140 糎は、集中地点間の数メートルの接合距離となり、やがて数十メートルを超える。そして、「接合 G3 は本遺跡から約 500m 程離れた荷鞍ヶ谷戸遺跡から江南町在住の関口氏によって採集された彫刻刀形石器と本遺跡第 1 ユニットから検出された削片が接合した」（川口編 1993 pp. 58）のである。ついに登録上では異なる百メートルを超える遺跡間の頁岩製石器の接合が実現した。ただし、一方は表採資料である。

ついで、「1 次調査時から切望されていた 5 B 地点と 1 G 地点の遺跡間（地点間）接合が根気ある接合作業から現実のものとなった」（八ヶ岳旧石器グループ 1996 pp. 5）。約 400m 離れた二地点での黒曜石製剥片の折損資料が接合し、削器が 1 点接合する。

さらに、「頁岩の彫刻刀形石器（下モ原 I 遺跡出土）と製作時にできる彫刻刀形削片（居尻 A 遺跡出土）の接合関係が得られました」「2 遺跡は段丘面を違えており、その比高差 40m、距離にして 600m の「遺跡間接合」と言うことになります」（山本・安部 1998 pp. 4・5）。異なる段丘面の遺跡間接合はついに 500m を越え、石材も頁岩製と黒曜石製があり、残核も含まれる 10 点以上の接合関係を持つに至ったのである。

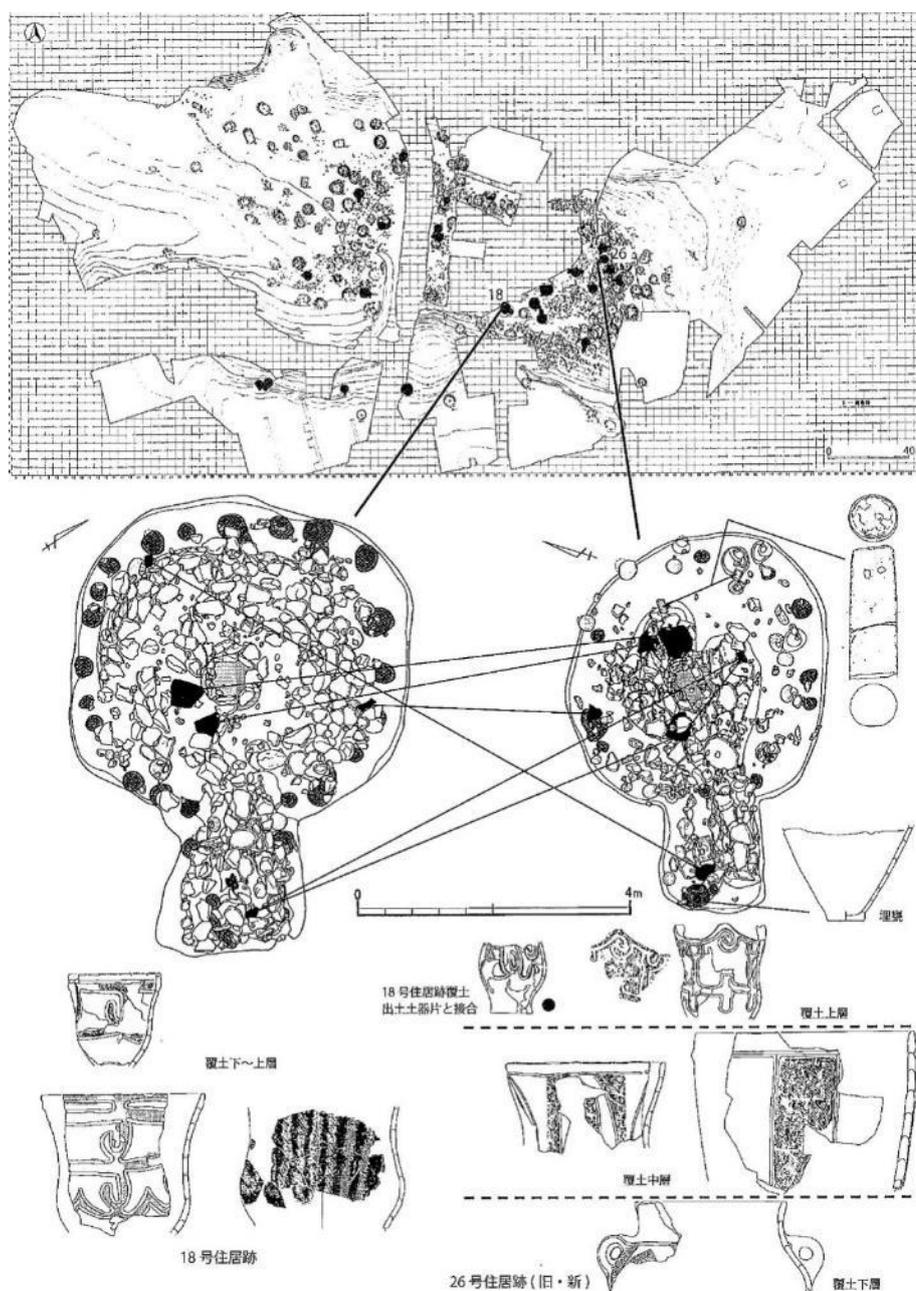
そして、何れの接合資料も細石器の時期や彫器に関連するという共通性があった。

その後、吉岡・用田の接合である。黄玉石の接合に端を発し、硬質細粒凝灰岩、珪質頁岩と 3 母岩 250 点に及ぶ接合資料が提示されたのである。ナイフ形石器、剥片、碎片、残核という器種構成は搬入原石までも復原され、石器再生と接合距離の問題（砂田 1993）も新たなる展開を模索することとなる。吉岡用田接合遺跡の集中地点間の距離は 2 km、比高差 12m、従来に至近距離以上の遺跡間接合の成功である。

両遺跡は県内でも有数の重層遺跡であり、出土層位の BB1層下部はAMSによる年代測定で、暦年補正 cal BP 24000-22500年が算出されている(中村 2014 pp. 124)。

利用石材である黄玉石は伊豆半島南部、凝灰岩・珪質頁岩は相模川水系の石材と想定される。接合成功後、相模野台地における同一層位出土遺跡の存在する関係各機関とも協力して同一母岩の検討と遺跡間での石器接合を行ったが新たな成果とはなかったが、今後のさらなる遺跡間接合の実践が待たれるところである。

ただし、骨片や角など、石器以外の資料が散乱するパンスヴァン遺跡(1V2層)(Gourhan, Brézillon eds 1972)ですら「説明のつかない関係」を念頭におくべきである。



敷石の分有・石棒の接合・土器の接合(山本典幸 2016)

## 2. 接合資料から見た石器製作の共通性

吉岡遺跡群B区の北側に集中する硬質細粒凝灰岩製の石器の接合状態がある。接合資料の4分の1～4分の4は四点の剥離順を示し、用田鳥居前遺跡から出土している。吉岡遺跡群B区出土石器に接合する四点は、非常に近接した時間幅の中で剥片剥離を行った石器であることが想定される。この中の1点、3番目(3/4)がナイフ形石器である。接合資料全体の観察からは、原石の色調が白色系、やや黒色系、そして赤色系があり、被熱による酸化赤色化の過程を反映させている。剥片剥離工程を観察すると、剥離面一枚の大きな打面を設定し、大形の剥片をまず剥離し、次の剥片を剥がしやすいように調整剥離を行い、小形の剥片を剥離する。こうして打面縁辺の調整を介在させて、大小交互に目的とする剥片を剥離する。



硬質細粒凝灰岩製石器の接合状態と剥離順(公益財団法人かながわ考古学財団 2015)



硬質細粒凝灰岩製石器の打面と剥離順(公益財団法人かながわ考古学財団 2015)

吉岡遺跡群B区からは、石器製作の道具である叩き石(ハンマーストーン)が出土してい

る。旧石器時代の遺跡は、石器製作活動を示す石器出土の分布範囲の周囲から叩き石が出土することが専らである。吉岡遺跡群B区では集中地点北側の縁辺から出土している。

叩き石は凝灰岩製の割と扁平な礫を利用して石割りをを行っている。叩き石正面左側が少々アバタ状に変形して、石割りに使用した痕跡となる。他の叩き石は、角がやや張り、対象とした打面等をコスる(擦る)ようにして剥片剥離を行った結果が想定される。こうした痕跡は実験による石器製作において、非常によく似た痕跡となることが知られている。

石器の裏面(主要剥離面)には、打面直下に打瘤裂痕(バルバースカー)と呼ぶ石片を叩き割った時の盛り上がった痕跡が出現する。とりわけ黒曜石の実験研究によると、非常に硬い石(叩かれる石材よりも硬い石)で叩くと、打瘤裂痕がよく発達する。反対に、叩かれる石材よりも柔らかい石や有機質(骨角製・木製)のハンマーで叩くと唇状になったりする。こうした石器に残された打瘤裂痕やその周囲の違いから、当時使った叩き石やハンマーの硬さ(ハード・ソフト)と、剥片石器に供された石材の相対的な硬さの関係が想定される。

吉岡遺跡群B区北側の石材は、黄玉石、とても質の良い凝灰岩、珪質頁岩、チャートで、打面が残っている状態と裏面となり、打瘤裂痕が観察できる。

その結果、石器石材よりもやや硬い石材を使つての石器製作が推定される。それは、石器石材よりも非常に硬い叩き石を使つて石器製作をした場合は、打瘤裂痕のさらなる発達が期待できるからである。

吉岡遺跡群B区出土の南側の剥片類で、一番大きな接合資料があり、同じ母岩の裏側の状態で、打瘤の状態がそれほど発達せず、B区の北側と南側では石器製作の方法に大きな違いはないことが指摘できる。

では、なぜ2つの集中地点が形成されたのかという命題がある。今回の石器観察では南北集中地点の間では石器製作の内容に差異はそれほど認められない。

用田鳥居前遺跡でも同じように集中地点があり、その縁辺から叩き石が出土し、台石のような石器もある。用田鳥居前遺跡の叩き石、残核、黄玉石の接合、珪質頁岩の接合資料が分布している。これも表面の状態、裏面の状態を観察すると、先ほど示した吉岡遺跡群B区の石器製作の痕跡とそれほど変化がない。すなわち、2,000m離れた2つの遺跡の石器製作の方法にはそれほど差異はない、逆にいえば、極めて共通した特徴をもった石器製作行動が想定できることになる。

言い換えれば、吉岡用田の接合資料から抽出した剥片剥離作業の等質性は石器製作上の技量差を抽出することはできない。すなわち、両遺跡の石器製作には同一のエキスパート、あるいは同じ技量や志向を目指した石器製作者の存在をも想定できることとなる。

## おわりに

吉岡遺跡群B区と用田鳥居前遺跡の2,000mの間で、石材を違えて接合するという事は、やはり両者の間に並々ならぬ関係、同一集団あるいは両地点間を往来した特定個人をも抽出できることにもなるのである。

2000年7月11日の吉岡・用田の遺跡間接合に私たちは色めきだち、収蔵資料の同一母岩の検索と検討に至ったが成功には至っていない。同じ年の2000年11月5日は、遺跡捏造がスクープされた日である。その後しばらくは遺跡間接合も揶揄されたこともあった。しかし、正真正銘の遺跡間接合の成果は両遺跡の成果を飛び出し、さらなる飛躍と新資料の提示があると信ずるのである。

今後実践する接合作業は既存資料の統合と抽出であり、遺跡間接合（異所間接合）は脱遺跡の構築を目指す気配もある。遺跡内母岩別資料、遺跡間母岩別資料、あるいは原石別資料など、新たな石器整理作業の構築である。骨器、角器、木器、毛皮、植物などの有機遺存体の欠如する日本の旧石器時代研究が、今回の石器製作痕跡遺跡の吉岡遺跡群B区と使用痕跡・廃棄痕跡遺跡の用田鳥居前遺跡という従来の拠点と出先の相関関係を、遺跡間接合の実証は、その反転をも視野に容れることも可能となるのである。

#### 【引用・参考文献】

- 粟田薫 2008「新堂廃寺出土の隅木蓋瓦再考」志学台考古 8 pp. 29-47
- 安蒜政雄 1992「砂川遺跡における遺跡の形成過程と石器製作の作業体系」駿台史学 86 pp. 101-128
- 五十嵐彰 1998「考古資料の接合—石器研究における母岩・個体問題—」史学 67- 3・4 pp. 105-128
- 笠懸野岩宿文化資料館 1996『接合資料を読む』資料集 pp. 39
- 上原真人 2007「コメント1 考古学から見た「国境」「境界」」史林 90-1 pp. 210-217
- 及川謙・横山真・品川欣也・小菅政夫・今野晃市・松山克胤・千葉史 2015「3D計測技術を用いた考古資料の接合研究—旧石器時代研究における新しい資料の認識にむけて—」一般社団法人 日本考古学協会第81回総会 研究発表要旨 pp. 20-21
- 川口潤 1993『埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第129集 白草遺跡1・北篠場遺跡川本工業団地関係埋蔵文化財発掘調査報告書』pp. 249
- 公益財団法人かながわ考古学財団 2015『20周年記念事業 公開セミナー記録集「神奈川の発掘調査成果にみる考古学研究の転換点—「発見」から導かれる研究の方向性—』pp. 147
- 砂田 pp. 83-88 改変
- 財団法人かながわ考古学財団・神奈川県立埋蔵文化財センター編 1998『公開セミナー記録集用田バイパス関連遺跡群ローム層中出土の炭化材／旧石器時代の住居状遺構を探る』pp. 103
- 財団法人かながわ考古学財団旧石器時代研究プロジェクトチーム 2001「旧石器時代後半における石器群の諸問題—相模野の遺跡間接合から—」研究紀要6 かながわの考古学 pp. 1-18
- 砂田 pp. 1-3・18 改変
- 杉原荘介・大塚初重 1955「常総台地における関東ローム層中の石器文化—市川市丸山遺跡について—」駿台史学 5 pp. 57-72
- 杉原荘介 1956「明治大学文学部研究報告考古学第一冊群馬県岩宿発見の石器文化」pp. 93
- 鈴木次郎 1980「第V文化層」寺尾遺跡神奈川県埋蔵文化財調査報告 18 pp. 135-178
- 砂田佳弘 1993「相模野の石器再生—器種形態の存続と改変—」神奈川考古 29 pp. 1-23
- 高倉純 2013「北海道白滝遺跡群の石器接合資料における技量差の判定と学習行動—2012年度研究成

- 果の概要一』『交代劇』第6回研究大会』発表
- 高倉純 2016「広郷石器群にみられる学習行動と文化伝達」晩氷期の人類社会—北方先史狩猟採集民の  
適応行動と居住形態— pp. 147-168
- 千田あゆみ・松山克胤・千葉史・今野晃一 2014「接合資料作成のための計測点群による高速な隣接剥  
離面探索手法」芸術科学論文誌 13-2 pp. 107-115
- 富井眞 2016「出土埴輪の原位置論的分析と破壊力学的検討から考える古墳の破壊」考古学研究 62-4  
pp. 49-70
- 鳥畑寿夫 1956「福島懸成田発見の石器に就いて」上代文化 26 pp. 23-28
- 中村雄輝 2014「関東地方における旧石器時代の年代と編年」旧石器研究 10 pp. 107-128
- 長沼正樹 2016「一回想—遺跡間接合の当時—」石展 かながわの歴史を彩った石の文化 pp. 97  
神奈川県立歴史博物館
- 藤森英一・戸沢充則 1962「茶臼山石器文化」考古学集刊 4 pp. 1-20
- 松沢亜生 1959「石器研究におけるテクノロジーの一方」考古学手帖 7 pp. 1-2
- 松沢亜生 1997「八千穂村池の平遺跡群トリデロック地点石刃技法の検討—とくに資料の剥離面および  
接合を読む視点から—」長野県考古学会誌 82 pp. 1-15
- 八ヶ岳旧石器グループ 1996「野辺山中ッ原 1G 地点の 2 次調査」第 8 回長野県旧石器文化研究交流会  
—発表要旨— pp. 48-53
- 山田しょう・志村宗昭 1989「石器の破壊力学 (1)」旧石器考古学 38 pp. 157-170
- 山中一郎 1992「日本における石器型式学研究」牟邪志 5 pp. 1-24
- 山本克・安部英二 1998「居尻 A 遺跡 (I J A)」津南町文化財調査報告第 24 輯平成 10 年度津南町遺跡  
発掘調査概要報告書 pp. 2-5
- 山本典幸 2016「縄文時代中期終末から後期初頭の柄鏡形敷石住居址のライフサイクル」古代 138  
pp. 207-228
- 渡邊仁 1948「所謂石刃と連続割裂法に就いて」人類学雑誌 60-2 pp. 33-39
- Leroi-Gourhan, A. et Brézillon, M., Eds. 1972, Fouilles de Pincevent - Essai d'analyse  
ethnographique d'un habitat magdalénien (la section 36), Paris, VII<sup>e</sup> supplément à "Gallia  
Préhistoire", CNRS
- Sonia Harmand, Jason E. Lewis, Craig S. Feibel, Christopher J. Lepre, Sandrine Prat, Arnaud  
Lenoble, Xavier Boas, Rhonda L. Quinn, Michel Brenet, Adrian Arroyo, Nicholas Taylor, Sophie  
Clement, Guillaume Daver, Jean-Philip Brugal, Louise Leakey, Richard A. Mortlock, James D.  
Wright, Sammy Lokorodi, Christopher Kirwa, Dennis V. Kent & Helene Roche 2015,  
3.3-million-year-old stone tools from Lomekwi 3, West Turkana, Kenya, Nature 521, pp. 310-  
315
- H. Roche, A. Delagnes, J.-P. Brugal, C. Feibel, M. Kibunjia, V. Mourre & P.-J. Texiera  
1999, Early hominid stone tool production and technical skill 2.34 Myr ago in West  
Turkana, Kenya, Nature 399, pp. 57-60